

オリーブの生産振興～更なる発展に向けて～

■ 土庄町、小豆島町 オリーブ生産者・法人 ■

(小豆農業改良普及センター 高八 弘、○掛鯛 吉洋、瀬尾 龍右)

●対象の概要

管内では、小豆島の南部や豊島を中心に約145haのオリーブが栽培され、国内最大のオリーブ産地を形成している。

栽培者数は173戸で、経済栽培されている面積の過半は農地保有適格法人及び大規模生産者（1ha以上）が占めている。

近年は、定年退職者、Uターンや島外からの移住等によりオリーブ栽培に取り組む新規の生産者も増加傾向にあり、将来の産地を支える担い手として期待されている。

●課題を取り上げた理由

小豆地域のオリーブは、県内面積の約7割、生産量の約8割を占める一大産地で、約20社の加工業者がオイルや化粧品などを製造している。

特にオリーブオイルは、国際コンテストにおいて入賞するなど、世界的にも評価されている。

流通面では、本県唯一のJAを事務局とするオリーブ生産集団（香川県農業協同組合小豆島果樹部会オリーブ班）が組織されており、明瞭な出荷基準のもと、共選・共販体制で、島内の加工業者へ出荷している。

一方、生産面では、島内の優良農地での開園がほぼ終了し、残された園地の多くは、不適な条件を有している。また、既存園地では、老木化や高木化が進行し、作業性や品質、収量が低下している園地が増加している。加えて、炭疽病対策、生産者の高齢化による担い手不足、生産拡大に伴うせん定枝や採油後の果実処理などが問題となりつつあるなど、多くの問題をかかえている。

このため、普及センターでは、生産者、JA、町行政、県研究機関が参画する「小豆島オリーブ振興協議会」で一致団結し、生産拡大を推進するとともに、高品質果実の安定生産技術や県オリジナル品種の普及、環境にやさしい農業実現に向けた取り組み支援を行うこととした。

●普及活動の経過

1 生産拡大支援

生産者を確保・育成するため、オリーブを始めた・基礎を学びたい方を町の広報誌等で募集し、基礎研修会の開催を通じて、オリーブ産業への参入や雇用就農を促進した。

永年性作物であることから、植栽前に園地確認に立ち会い、植栽予定地の現地調査を実施し、不適地条件がある場合は、事前に解消するよう指導・助言した。

新規開園や園地改良、その後の規模拡大や6次産業化に向けた加工施設整備などがスムーズに行えるよう経営改善計画の策定支援等を行うとともに、活用できる補助事業等の紹介や説明を行った。

2 高品質安定生産技術の確立・普及

果実の品質を一定レベルに引き上げるため、主要管理時期に講習会を開催し、その年の気象条件に即した注意喚起を行うとともに、毎年「栽培のしおり」の作成・配布をした。



樹高切り下げ方法の実技指導

また、技術レベルの高い生産者や農業法人を対象に、新たな技術や先進的な機械・施設などを紹介するため、栽培高度化研修会を開催した。

さらに、高齢化に対応するため、講習会において、樹高の切り下げ方法について実演し、作

業性の改善を図るよう指導した。

3 県オリジナル品種の普及・推進

付加価値の高いオンリーワン産地を目指すため、収穫量の減少につながる主要病害「炭疽病」抵抗性品種である県オリジナル品種「香オリ3号」、「香オリ5号」の生産拡大に取り組むとともに、モデル園地を設置し、当該園地での栽培特性を把握した。また、生育状況に応じた栽培管理方法を提案するとともに、新たな知見については講習会等を通じて生産者に周知した。



枝吊りによる整枝を行った「香オリ3号」

4 環境にやさしい農業の推進

採油後の果実は、これまで、ブランド「オリーブ牛」の餌として利用してきたが、生産量の増加にともない供給過剰となりつつある。

このため、新たな活用方法として、枝葉チップを堆肥化する既存の方法で、堆肥化が可能か現地試験を実施することとした。

●普及活動の成果

- 1 新規就農または雇用就農者は、過去5年間（令和元年～令和5年度）で34名あった。
- 2 補助事業等を活用し、3年間（令和3年～5年度）で2.3haが新・改植され、面積拡大や園地の若返りが徐々に進んでいる。

表1 事業を活用した新改植・施設等導入状況

事業内容	令和3年度	令和4年度	令和5年度
新・改植	79a	79a	71a
栽培管理用機械・施設等	・防獣柵13a	・防獣柵10a	・防獣柵21a ・収穫機3台 ・排水施設4a
加工施設等	・採油機3台 ・充填機1台 ・ホッパー3台 ・貯蔵タンク10本 ・ろ過器1台	・充填機2台 ・ホッパー2台 ・貯蔵タンク3本	・新漬け製造用除水機1台

また、新・改植にあわせて、収穫機などの省力化機械、防獣柵などの品質向上施設の導入も進んだ。高木化し作業性が低下した園地では、計画的な樹高の切り下げ作業が進められ、令和3年～5年度までに46園地で低樹高化が実施された。

- 3 県オリジナル品種の植栽面積は、苗木の配布が始まった令和2年～令和5年度（計画含む）までに、香オリ3号が2.4ha、香オリ5号が2.6haに拡大した。また、令和5年度は、両品種ともに、初出荷を迎えたことから、関係機関・団体と連携した収穫風景のプレスツアー、加工品の販売開始にあわせたプレス・PR試食により、認知度も徐々に高まりつつある。
- 4 採油後のオリーブ果実を、一定量、枝葉チップに混和した堆肥は、枝葉チップのみのものと比べて、腐熟度に大きな差はなく、6か月で概ね腐熟に達することが確認できた。また、この試験に協力した法人では、試験後も果実入り堆肥の製造を継続するとともに、自らの園地に施用するなど、循環型農業の実現に向けた自主的な取り組みを開始した。

●今後の普及活動の課題

オリーブ栽培面積は、他県でも急速に増加し、各地域でオリーブオイルをブランド化する動きがみられる。このような中、県オリジナル品種を活用したブランド化が図られることは、小豆島のオリーブ産地としてのトップワンの地位を不動のものにするアイテムとして必要不可欠であると感じている。

そこで、県オリジナル品種を含む優良品種への新・改植を推進するため、植栽前に、不適な条件の解消案を提示するとともに、植栽密度や幼木期の整枝・せん定の適正化により、さらなる面積拡大と早期成園化を図る。

また、加工販売に携わる企業と連携協力することが必要不可欠であることから、2次産業部門との一体的な支援体制が構築されるよう関係機関への働きかけを行う。

さらに、オリーブを始めたい方、新規就農者や新規雇用者、技術レベルの高い方などそれぞれのレベルに応じた講習会・研修会を開催し、生産者の確保・育成を図る。